

－ 百日咳について －

百日咳は、平成 30 年 1 月 1 日より 5 類定点把握疾患から全数把握疾患になりました。全数把握疾患に変更されたことにより、定点医療機関を受診しない小児の発生状況や小児以外の年齢層も含めた発生動向の把握が可能となりました。全数把握対象疾患となり 1 年が経ち、みえてきたこと、また奈良県における百日咳の発生状況について報告します。

▶ 百日咳とは

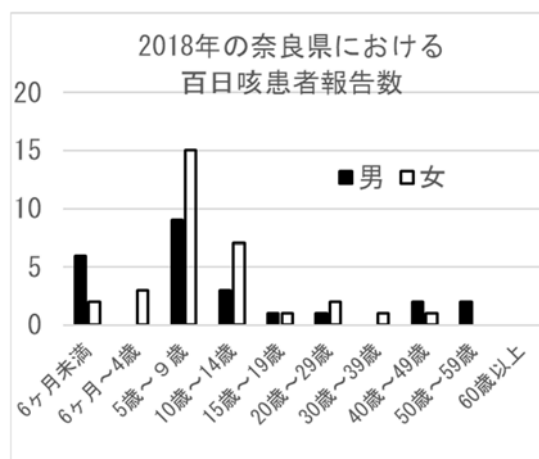
百日咳は、特有のけいれん性の咳発作を特徴とする急性の呼吸器感染症です。いずれの年齢でも感染しますが、1 歳未満の乳児、特に生後 6 ヶ月未満の乳児は重症化しやすく死亡者の大半を占めます。成人は軽症で済むことも多いですが、乳児にとっての感染源となるため注意が必要です。予防法としては、ワクチン接種があり、接種時期は生後 3～12 ヶ月の間に 20～56 日の間隔を空けて、3 回接種します。その後 6 ヶ月以上（標準的には 12～18 ヶ月）の間隔において 1 回接種します。家族に患者が出た場合、ワクチン接種を行っていないければ 90%が家族から感染してしまうとされています。

▶ 全数把握疾患になり、みえてきたこと

- ・百日咳は、小児だけでなく全年齢層に患者が存在すること
- ・予想していたよりも報告数が多いこと
- ・6 ヶ月未満の乳児は、やはり家族が感染源となっており、特に同胞からの感染が多いこと
- ・三混あるいは四混ワクチンを 4 回接種していても 5 歳頃から患者が増えていること

▶ 奈良県の状況

奈良県における報告数は、2018 年の 1 年間で 56 例ありました（年齢層別報告数は右図に示す）。最も報告数が多かった年齢層は 5～9 歳であり、24 例中 22 例が 4 回のワクチン接種を行っていました。また重症化リスクが高いとされる 6 ヶ月未満の乳児の報告は 8 例あり、感染経路は、家族内感染が 5 例、不明が 3 例でした。家族内感染は同胞から 2 例、母親から 1 例、母親及び同胞から 1 例、祖母及び叔母から 1 例でした。



▶ まとめ

百日咳が全数把握疾患となり、報告数は予想していたよりも多いとされています。しかし、たった1年の状況であるため、これが標準的であるのか流行年であったのか現時点ではわかりません。今後の継続したサーベイランス調査により把握できると考えられています。サーベイランス調査から得られることは多く、百日咳はワクチン接種を行っていても 5 歳頃から患者は増えており、現在のワクチンだけでは根本的な予防には不十分であることが分かってきました。そのため接種時期や追加接種などの検討が始められています。現状では、ワクチン接種に加えて咳エチケットなどの飛沫感染予防策も実施するなど、様々な対策を組み合わせる必要があります。特に重症化しやすい乳児のいるご家庭では、周りに患者が発生した場合は患者と乳児をできるかぎり近づけないなどの対応をとることも大切です。